

主 題：聖書の知恵を追い求めて①：主を恐れること**聖書箇所：箴言 1 章 1－7 節**

ヨハネの福音書を少し休憩して、夏の間、新しく学びたいのは箴言のみことばです。今回はいつものように箴言の最初から順に最後まで見ていくではありません。数々の知恵が記されているこの書に関しては、いくつかのテーマに絞って考えていきたいと思います。その内容に入っていく前に、少し立ち止まって考えてみてください。私たちはみな日々の生活の中であって、さまざまな選択を迫られる場面に出くわします。その選択は些細なものから重大な結果を伴うものに至るまでいろいろなものがあります。たとえばきょうの礼拝が終わった後、昼ご飯をどこで食べるのか、何を食べるのか、それも一つの選択です。そのような小さなものだけではなくそれ以上に、たとえば卒業した後どの学校に進学しようか、今の仕事を続けようか、やめようか、だれと友達になって、だれと結婚して、どのように子育てをしようか、今自分が持っている持ち物やお金をどのように使おうか、そういったものもそれぞれが考えなくてはならない大切な選択になります。ひとりひとりが抱えているものはもちろん違います。私たちは例外なく日常生活の中であって、いろいろな選択や決断を常に下しながら歩んでいるのです。

そのような選択や決断を下す時、私たちは普段何を頼りにしているのでしょうか？この世の専門家と呼ばれる人たちでしょうか？テレビやネットに載っている情報でしょうか？親しくしている周りの友人、これまで自分が培ってきた経験や勘、知恵でしょうか？もちろんここにいる多くの人たちは、「神様やみことばに拠り頼んでいます」と言われると思います。しかし、自分の抱えている問題に対して、みことばがはっきりと語っていないような場面に置かれたとしたら、その時はどうするのでしょうか？それでも神様のことばを変わずに求めて、変わらずに信頼しようとしているのでしょうか？私たちはみな日々の生活の中であって、さまざまな選択を迫られる場面に出くわします。食べるにも、飲むにも、何をするにも、神様の栄光のために生きていこうとする中であって、時に何をしたらいいのかわからない場面に出くわすこともあるのです。

それではそのような時、私たちにはいったい何が必要になるのでしょうか？そのような時に必要になるのは神様の知恵です。神様はご自身のことばである聖書を通して、この複雑な世であって私たちがどのようにしてふるまっていくべきなのか、どのようにして神様のために生きていくべきなのかを教えてください。そして、その知恵が最も明白に記されている本、書こそ今回私たちが見ようとしている箴言になるのです。だからこそ私たちが日々の生活を生きていく中であって、出会うさまざまな選択を考える時に私たちに必要な知恵を自分自身のこととして、これからみことばを通していっしょに学んでみましょう。

○聖書の知恵を追い求めて

この朝、私たちが見ていく箴言 1：1－7 節のところは、箴言全体の大きな導入、イントロとも言える部分です。箴言は全体を通して、神様の知恵がいったい何なのかを教えてください。特にきょうは四つの質問を投げかけながら考えてみたいと思います。四つの質問は、知恵の根源、出どころがどこなのか、知恵の目的は何なのか、知恵はだれに必要なのか、そして知恵は何から始まるのかです。この四つの質問を投げかけながら、私たちにとって大切な、たくさんのことを教えてくれる箴言の導入を見てみましょう。

箴言 1：1－7

「1 イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言。2 これは、知恵と訓戒とを学び、悟りのことばを理解するためであり、3 正義と公義と公正と、思慮ある訓戒を体得するためであり、4 わきまえのない者に分

別を与え、若い者に知識と思慮を得させるためである。：5 知恵のある者はこれを聞いて理解を深め、悟りのある者は指導を得る。：6 これは箴言と、比喩と、知恵のある者のことばと、そのなぞとを理解するためである。：7 【主】を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」

1. 知恵の根源はどこか？：神様ご自身 1 節

では早速一つ目の質問から考えてみましょう。一つ目は、知恵の根源、知恵の出どころがどこなのかです。そして、その答えは神様ご自身でした。このように箴言は始まっています。「イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言。」と。ここにひとりの著者が出てきました。箴言を実際書き記した中心的人物の名はソロモンでした。ソロモンとはいったいどのような人だったのでしょうか？彼こそサウル王様、ダビデ王様と続いた王座を引き継ぎ、イスラエルの民を率いていく重大な責任、務めを担っていた人物でした。また、彼こそ神様が救い主を与えますと約束していたまさにダビデの血筋を受け継ぐ人物でした。そのような歴史上を見ても偉大な人物の知恵に満ちたことばが、今私たちが見ている聖書の中に残されているのです。ただ一つ忘れてほしくないことがあります。ソロモンの持っていた知恵は、どれも彼自身から出たものではなく神様から与えられたものだったということです。ソロモンの知恵は究極的に神様から与えられたものでした。出どころは人ではなく神様でした。

ソロモンが王座に着いた後、神様がソロモンの夢の中に現れて、そして彼に尋ねたのです。「あなたに何を与えようか。願いなさい。」と。そして、ソロモンはこのように答えていました。Ⅰ列王記3：7－10にその時の様子が記されています。「：7 わが神、【主】よ。今、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。：8 そのうえ、しもべは、あなたの選んだあなたの民の中におります。しかも、彼らはあまりにも多くて、数えることも調べることもできないほど、おびたしい民です。：9 善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびたしいあなたの民をさばくことができるのでしょうか。」：10 この願い事は主の御心にかなった。ソロモンがこのことを願ったからである。」と。まだ若くて、民を導く経験の乏しかったソロモンは、へりくだって神様に対して知恵を求めています。そして、その願いが聞き入れられた彼は神様から知恵の心、判断する心を与えられるのです。そして、それが与えられた結果、彼は地上で最も知恵ある者になりました。ほかに比べる者はいません。彼ほど知恵を持った人物は、イエス様を除いて歴史上ひとりもいませんでした。問題や混乱を抱えるたくさんの人たちが、知恵にあふれた彼のもとへ助けを求めてやって来るようになるのです。4：3 4 節にこのようにその様子が書いています。「ソロモンの知恵を聞くために、すべての国の人々や、彼の知恵のうわさを聞いた国のすべての王たちがやって来た。」と。すばらしい光景ではありませんか。若者から年寄りに至るまで、ましてやほかの国の王様までもが彼の知恵に満ちたことばを聞きたいと思って、毎日やって来ました。ソロモンは王様として富や権威を持っていただけではありません。知恵の源である神様から与えられた知恵があったからこそ、ソロモンに並ぶような者は、文字どおりだれひとりとしていなかったのです。

ソロモンはすばらしい知恵を持っていましたが、感謝なことはそのような神様の知恵を私たちも聖書を通して知ることができるということです。私たちの目の前にある聖書は変わらない神様のことばです。そして、この神様のことばを通して、この知恵ある人物の記した箴言を私たちが開く時、そこに変わらない真理を見て取ることができます。私たちがこれから箴言の内容すべてではなく抜粋して見ていきますけれども、私たちが箴言を見ていく時、そこに愛する神様のご性質や神様が望まれていること、忌み嫌われていることを見て取ることができます。

しかし、神様の姿が描かれているだけではなく、箴言を見ていけば、私たちの日常生活に直結するいろいろなテーマについても見て取ることができます。たとえば箴言の中に家族や友達に関すること、仕事や子育て、お金に関すること、私たちが抱く感情に関することから人の話すことばや人とのやりとりに関することなど多岐にわたる内容が記されているのです。そして、その一つ一つを私たちが見ていく時、

私たちはいつも覚えることができます。その一つ一つがだれかの思いつきや人の考えるアドバイスではないということです。それらはどれを取ったとしても、すべて神様から与えられた知恵だったということです。今の私たち自身が神様の前を忠実に正しく歩んでいこうとするのに決して欠かすことのできない神様の知恵、実践的な教えが、私たちの目の前にある箴言でした。これから学ぶ知恵にあふれたソロモンの箴言のことばは神様から与えられたもの、ほかのだれでもない神様からの知恵だということを私たちは覚えておくべきだということです。それが一つ目の問いの答えでした。知恵の根源、出どころは神様でした。

2. 知恵の目的は何か？：三つの目的 2－3節

次に二つ目の質問です。二つ目は知恵の目的は何なのかです。神様の知恵である箴言は、私たちに対して特に三つのことをもたらしてくれる効果がありました。

1) 実践的な知恵をもたらすもの 2 a 節

まず一つ目に、箴言は実践的な知恵をもたらしてくれるものでした。1節の続きからこのように書いています。「……ソロモンの箴言。：2これは、知恵と訓戒を学び、……」と。ここで注目してほしいのはまず「学び」ということばです。

▶「学ぶ」

「学ぶ」ということばを聞くと、どのような様子を思い浮かべるでしょうか？もしかしたらある人は机に座って、勉強することを考えるかもしれません。いろいろな本とか調べ物をして、頭に知識を蓄えることを考えるかもしれません。しかし、覚えていてほしいのはここでの「学ぶ」はそのようなものではありませんでした。ここで使われていた「学ぶ」ということばには、もともと何かを個人的な体験や経験を通して知るといった意味が含まれていました。単純な知識の話ではありません。個人的な経験を通して知ること、深い関係のことを表すものでした。

因みにこれと同じことばは創世紀4章の中でも使われています。創世紀4：1ではアダムとエバとの関係にも使われていたことばでした。「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。」と書かれています。間違いなくここで言われている意味は明白です。アダムがここでエバのことを知ったというのは、エバの名前とか情報を単に知識として知っていましたという話をしているわけではありません。彼らの間には個人的な深い関係がありました。そのような個人的なものとしてアダムはエバを知っていたのです。それが「学ぶ」ということばのもともとの意味でした。ここで言われていることも同じです。私たちは何かについて単に知識として知っているだけではなく、その何かを自分のこととして知っていて、個人的に親しい関係を持っていることが言われていたのです。「学び」とは実際に何に対してそのような深い関係、個人的な関係を持つのでしょうか？何を学ぶと書いていましたか？「知恵と訓戒を学び」と書いていました。何に対して深い関係を持つのかは「知恵と訓戒」でした。

▶「知恵」

「知恵」とは何でしょうか？「知恵」というのはもともと巧みな技術や能力を表すことばでした。このことばのイメージを思い浮かべてみるためには、ほかの聖書箇所を見る方がわかりやすいと思いますので、少し別の箇所で見ましょう。出エジプト記31：6には幕屋で働く職人たちが持っていた技能について描かれていました。「……わたしはすべて心に知恵のある者に知恵を授けた。彼らはわたしがあなたに命じたものを、ことごとく作る。」と書かれています。ここで出てきていた「知恵」ということばが同じことばですけれども、幕屋で働く職人たちが持っていた能力や技能のことを知恵ということばが表していたのです。

同じようにして詩篇107：27を見てみると、今度は荒波を乗り越なす船乗り、漁師さんが持っている技能について同じことばが使われています。27節にこのように書いています。「彼らは酔った人のよう

によろめき、ふらついて分別が乱れた。」と。否定的なことばで書いていますけれども、この「分別」ということばが同じ「知恵」ということばでした。2017年版の訳を見てみると「知恵はことごとく呑み込まれた」というように訳されていました。

この二つから言えることは、幕屋の職人にしても、船乗りにしても、彼らはただ幕屋の建て方を知っているだけ、ただ船の乗り方を知識として知っているだけではないということです。彼らはただ知識としてそれを知っていただけではなく、その知識を正しく用いて、そして必要な形で実践することができました。つまり知恵というものは自分が持っている知識を正しく用いて、その場面に最善の行動を取る能力のことを表していたのです。幕屋で働いている人たちがただ知識を持っているだけではなくて、その知識を使って上手に幕屋を建てることができるように荒波を乗りこなすことのできる船乗りたちが、船の操り方や波の高さをただ知識として知っているだけではなく、それを用いて使うことができるように、知恵は持っている知識を正しく使うことができる、その場において必要なこと、最善のことのできる能力のことでした。

そして、これが私たちにとっては大切なのです。なぜかというと、日々の生活の中にあって、私たちにはいろいろな状況が起こります。だれかのしたことでも不満や怒りを覚えてしまうこともあります。与えられた責任を前にして何をしたらいいのかわからなくなってしまうこともあります。そのような時に知恵はみことば、神様の知識を用いて、神様の前にふさわしい行動が何なのか、その状況の中にあって神様の前にふさわしい態度は何なのかを教えてくれて、ふさわしくふるまうことができるようにしてくれる能力だということです。箴言はそのような知恵を与えてくれます。

▶「訓戒」

そして、もう一つ「訓戒」ということばが続きに出てきました。2節のところの「知恵と訓戒を学び」の「訓戒」ということばは、「懲らしめ」、「矯正」や「叱責」を表すことばでした。私たちは何かが正しいことや間違っているということを、本を読んで知識を蓄えることによって学ぶだけではありません。私たちにとって最大の学びは、みことばやまわりのだれかが実際に自分のことを直してくれること、矯正してくれることだったりするのです。もちろん自分自身が正しいと思い込んでいて、本当は道から外れていることが示されると最初はあまりうれしくないかもしれません。しかし、真理によって私たちが正される時にこそ私たちは心碎かれ、神様を個人的に知るようになるのです。レイ・オートランドという先生もこのような説明を残していました。「皆さん。申し訳ありませんが、私たちは生まれながらに知恵があるわけではありません。知恵は主の教えと訓練を通して、懲らしめと矯正を受けながら、苦勞して身に付けていくものです。それは私たちにとって好ましいものではありません。屈辱的に感じることもあります。自分が間違っていると認めるのは難しいことです。しかし、私たちがどれだけ素直に教えを受け入れられるかによって、知恵においての成長度合いは決まるのです。」と。

果たして私たち自身は、みことばを通して主の訓戒のことばを見る時、そのことばに自ら進んで従おうとしているのでしょうか？もし仮にだれかが愛を持って自分のところにやって来て、みことばから過ちを正そうとしてくれるのであれば、道から外れていることを正そうとしてくれるのであれば、そのことばにすなおに耳を傾けようとしているのでしょうか？箴言12：5に「愚か者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のある者は忠告を聞き入れる。」と記されています。自分の道が正しいと思っている者は、「愚か者」だと言われていました。もちろん普段自分の道が正しいとは口にはしなかったりするでしょう。いや私も間違いがあります、いや私も弱いところがありますと私たちは口では言うかもしれませんが、私たちが心の中で本当に何を思っているかは、私たちがだれかから訓戒を受ける時、私たちがみことばから間違っていることを示される時の応答で、それがわかったりするのです。知恵のある者は忠告を聞き入れます。神様の知恵である箴言を学んでいくのであれば、私たちはこの知恵や訓戒をますます個人的に知っていくようになります。

箴言を学んでいけば学んでいくほど、神様の知恵を学んでいけば学んでいくほど、私たちは聖書の知識を学んで蓄えるだけではありません。その知識によって、その状況にふさわしい判断を下すことができるようになるだけでなく、間違っていることをさらに正されていって、神様の前に喜ばれる道が続けて歩むことができるようになるのです。それが、箴言が私たちに教えてくれることでした。さらに言えば箴言は大きなことだけではなく、細かいことも教えてくれます。夫婦関係や友人関係、自分の話すことば、お金や持ち物の使い方など私たちはいろいろな実践的な面において、みことばが何を教えてくれるのかに耳を傾けることができます。そして、それに耳を傾けながら神様が求めていることを知恵と訓戒をもって、実践していくことができるのです。それが一つ目に箴言がもたらしてくれるものでした。

2) 霊的判断力をもたらすもの 2 b 節

二つ目は、箴言は霊的判断力をもたらしてくれるものでした。

▶「理解する」

2 節の最後を見ていただくと、このように記されています。「……悟りのことばを理解するためであり、」と。ここで「理解する」と訳されていることばが出てきました。「理解する」というのは、何かに精通する、何かのことをよく知るといった意味に加えて、何かに精通しているから、何かのことをよく知っているから、それに基づいて何かを見分けることや何かを識別するといった意味が含まれていたのです。

▶「悟りのことば」

また、具体的に何に精通するのかというと、ここでは「悟りのことば」に精通することでした。言い換えれば「悟りのことば」とはみことばに精通するということでした。つまりまとめると、私たちが箴言を学んでいくのであれば、私たちはみことばにさらに精通するようになり、そしてその結果、みことばによって何が神様の前に受け入れられ、何が神様の前に受け入れられないのかを見分けることができるようになります。

それは私たちにとって大切だと思いませんか？ 私たちのまわりで起こることはすべてが白黒ははっきりしたものではありません。もちろん神様の前にこれをするべきとか、すべきでないとか、はっきりしていることはたくさんあります。しかし、実際は多くの場面であって、私たちは何を選択すればいいのかよくわからないような状況に直面することも多々あるのです。そのような時はどうしますか？ ある人はそのような場面に陥れば、すぐにみことばではなくてほかのものに頼って判断を下そうとします。自分の置かれている状況と世の中の常識や情報、自分の過去の経験や思いなどを横に並べて、それと比べ合わせて、それを頼りにして自分の選択を決めたりするのです。

しかし、そのような時こそ私たちは覚えていないといけません。神様の知恵であるみことばこそ私たちに必要な判断力を与えてくれるものだということです。そのような状況に陥った時こそ、みことばは私たちに必要な助けを与えてくれるのです。それは箴言がもたらしてくれる約束でした。ですから、私たちがみことばを学ぶことは重要でした。私たちはみことばを愛して、みことばを忍耐深く学んで、みことばによって歩んでいこうとするのです。みことばが私たちにとっての宝でした。かつての詩篇の著者もこのようなことばを残しています。詩篇 119 : 97-99 で「:97 どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。:98 あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。:99 私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。」と書かれています。これは私たちが目指すべき姿でもありました。必要な判断力を与えてくれることが箴言の一つの効果でした。

3) 道徳的に正しい歩みをもたらすもの 3 節

そして、三つ目に箴言は道徳的に正しい歩みをもたらしてくれるものでした。3 節にこのように続いています。「正義と公義と公正と、思慮ある訓戒を体得するためであり、」と。読まれた時に気づいたと思いますが、同じようなことばが最初に三つ並んでいました。

▶「正義」

「正義」というのは文字どおり正しいことをすることです。正しいことをするとは、どのような状況であつたとしても、どのような環境に置かれていたとしても、たとえまわりにだれも見えていなかったとしても、その人は神様のみことばに添った正しい、誠実なことをなそうとふるまうのです。

▶「公義」

次に出てきた「公義」というのは正しいことと間違っていることを判断することです。その人は真理と偽りが何であるかをみことばによって見分けることができるというのです。

▶「公正」

最後に「公正」というのは、ことばからもわかりますが、平等であるということです。だれかをえこひいきしたり、差別したりすることなく、その人はいつもだれに対してでも同じ基準で、公平な態度を取ろうとするのです。

神様の知恵は、私たちが実践的な知識を、霊的な判断力を与えてくれるだけでなく、私たちのうちに神様の正しさを生み出してくれるものでした。さまざまな問題が起こっていく日々の中にあつて、知恵は変わらず、私たちが神様の前に何が正しくて、何が善であつて、何が間違つていて、何が悪なのかを見分けることを可能にしてくれるというのです。それが、箴言が私たちに与えてくれる一つのことでした。まさにこれこそ知恵を求めていたソロモン自身が強く望んだことだったのです。Ⅰ列王記3：9で彼はこのように言いました。「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。」と。そして、知恵の心が与えられました。そして、神様からそれが与えられた後、彼は最初に一つの場面に直面するのです。ソロモンの前に、同じ家に住んでいて、産んだ子どものひとりが亡くなったふたりの遊女がやって来ました。そして、ふたりの遊女はそれぞれに主張していたのです。「生きているのが私の子で、死んでいるのが相手の子です」、「眠っている間にあの人が自分の子と取り替えたのです」と。どちらもが自分の子であると言い張っている場面でした。DNA鑑定もない時代に、非常に難しい判断が問われる状況でした。ソロモンは「剣を持ってきなさい」と命じて、そして、「生きている子を二つに切り分けて、それぞれに半分ずつ与える」というのです。信じられないようなことばだったでしょう。しかし、その時、実の母親は「生きている子を別の女に与えてください」、「決してその子を殺さないでください」と言って叫びました。その反応からソロモンはだれが偽りを言っていて、だれが正しいことを言っているのかを判断することができたのです。これが、神様が与えられる知恵でした。

そして、この話を聞いてイスラエルの民もこのようなことばを残しています。Ⅰ列王記3：28に「イスラエル人はみな、王が下したさばきを聞いて、王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。」と記されています。ソロモンのうちには彼が求めた神の知恵がありました。そして、それが働いていたからこそ彼はすばらしいことをなしたのです。すばらしいことに神様の知恵は、どのような状況にあつたとしても何が正しくて、何が間違っているのかを見極めることが可能でした。そのようなすばらしい知恵を私たちは聖書を通して、箴言を通して、自分のこととして知っていくことができるというのです。それが与えられた知恵の目的でした。

3. 知恵は誰に必要なものか？：すべての人 4－6節

そして次に三つ目です。三つ目の質問は、この箴言はだれに必要なものなのかです。そして、その答えは続きの4－6節のところに挙げられていました。答えは、未熟な者と成熟した者、つまりすべての者、すべての信仰者でした。4節からよく見てください、このように続いています。「：4 わきまえない者に分別を与え、若い者に知識と思慮を得させるためである。：5 知恵のある者はこれを聞いて理解を深め、悟りのある者は指導を得る。：6 これは箴言と、比喩と、知恵のある者のことばと、そのなぞとを理解するためである。」と。ここには大きく分けて二組の人々が挙げられていました。4節に一つ目のグループが挙げられました。最初に出てきていたのは「わきまえない者」と「若い者」たちでした。この人たちはいったいどのような

人たちなのでしょうか？「わきまえのない者」、「若い者」というのは、まだまだ駆け出しの者ということです。神様のことを知り始めて、神様のことばをまだまだ知らないからこそ、純真であるからこそ、容易にだまされることがあったりする者たちのことです。彼らはまだまだ神様のことばを知りません。未熟であるがゆえに、いろいろなあやまちや罪を犯してしまうこともあるのです。

そして、これはここにいる私たちだってみな同じです。私たちも信仰の歩みを始めた時、最初から成熟した者として始めた者はだれもいません。どれだけ実年齢を重ねていたとしても、どれだけいろいろな知識や経験を世の中で持っていたとしても、すべての人がキリストによって新しく生まれ変わった時、すべてが信仰の幼子として歩き出すのです。そして、赤ちゃんとして歩き出すからこそ、まるで生まれたばかりの赤ちゃんが母親の乳を熱心に求めるように、私たちは霊的な乳をいつも求めて、みことばによって成長していこうとするのです。この世でも霊的な話でも同じでした。もし生まれたばかりの赤ちゃんが、突然私はもう十分飲みましたので、母親の乳はもういりません、もう満腹ですから私は飲まなくてもいいですと言い出したらどうなるのでしょうか？間違いなく私たちは大きな問題が起こっていると思うでしょう。それでは成長していかないと、赤ん坊のことを心配するでしょう。

しかし、これは霊的な面でも同じことが言えました。私たちはみことばの乳によって成長していくのです。そして、それを拒むような人に対して箴言は繰り返し、繰り返しいろいろなことを警告していました。みことばを求めないような者に対して、そのことを良しとはしませんでした。そのような者たちのことを箴言は「愚か者」と呼んでいたのです。箴言 12 : 1 に書いていました。「訓戒を愛する人は知識を愛する。叱責を憎む者はまぬけ者だ。」と。「みことばをさげすむ者は身を滅ぼし、命令を敬う者は報いを受ける。」と箴言 13 : 13 に書いていたのです。箴言が言っていることは何も難しいことではありません。みことばによって成長していくと言われているからこそ、みことばを拒むような者たちは何でそのようなことをしているのですか、赤ちゃんのゴールが赤ちゃんのままでなく大人であるのと同じように、信仰者はみなみことばの糧によって、未熟な者から成熟な者に成長していくことが欠かせませんでした。神様の知恵はそのような「わきまえのない者」、未熟な「若い者」にとっても欠かせないものだったのです。

しかし、4節のところでそのような未熟な者について語っていましたがそれでも、それだけではありませんでした。続く5節のところには、「知恵のある者は」、「悟りのある者は」と書かれていました。つまり何が言われているかということ、みことばの知識をたくさん蓄えていて、神様のことを個人的に知って、歩み続けている成熟した者であったとしても、知恵は変わらず必要なのだと言うのです。未熟な者であろうが、成熟した者であろうが、聖書が言っていることは同じでした。両方必要不可欠です。箴言 9 : 9 にもこのように書いていました。「知恵のある者に与えよ。彼はますます知恵を得よう。正しい者を教えよ。彼は理解を深めよう。」と。言い換えれば、未熟な者であろうが、成熟した者であろうが、この地上にあってゴールラインを割るなんてことは決してないということです。

しかし、気をつけておかないと、まるでゴールラインを切ったかのように歩むことはできます。そして、私たちにとって最も大きな危険は、私たち自身が満足することです。自分がもうすでにたどり着きました、もう自分は救いを得ているので、何もほかには必要ありませんといった勘違いは、私たちの心を傲慢にさせ、さまざまな罪に陥らせるようになります。成熟な人たちが罪に陥ることは多々あります。なぜなら、神様の聖さを追い求め続けたい者はあるところでつまずき、姦淫の罪を犯すことがあります。神様の正しさをもう自分は知ったと満足し、その神様の正しさを追い求め続けなければ、その者は自分は正しいと思い込んで、そして、みことばの真理を受け付けないことがあります。小さな満足が小さな妥協を生むようになり、小さな妥協は小さな罪をもたらしようになり、小さな罪は大きな罪へとつながることが数え切れないほどあるのです。満足すること、それは私たちにとって大きな危険でした。

だからこそ、私たち自身、先週を振り返ってみて、神様の知恵を、神様を知ることをごだけ求めていたでしょうか？まだ自分はたどり着いていないと、自分の弱さや足りなさをすなおに認めて、「神様もっ

と私はあなたのことを知りたいです」、「もっと私はあなたに喜ばれる者として成長したいです」と、祈ることにどれだけ私たちは時間を費やしていたでしょうか？神様の知恵は、みことばを通して知ることができます。そして、その神様の知恵は未熟な者であれ、成熟した者であれ、私たちすべてにとって欠かすことのできないものでした。

4. 知恵は何から始まるのか？：主を恐れること 7節

そして最後にもう一つ、四つ目の質問ですけれども、四つ目の質問は、知恵は何から始まるのかです。そして、その答えはみことばに明白に記されていました。残された7節を見てください、このように書いていました。「【主】を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」と。皆さん知恵はいったい何から始まるのでしょうか？私たちに実践的な知識や霊的な判断力や道徳的に正しい歩みをもたらしてくれる神様の知恵は、どこから始まるのでしょうか？そのすべては「主を恐れる」ことでした。知識のすべての始まりは「主を恐れる」ことでした。

「主を恐れる」というのは簡潔に言うのであれば、主の前に正しい恐れと敬意を抱いて、主の前にひれ伏し、心から従うことです。勘違いしてはいけません。「主を恐れる」とは、ただ主の前にふさわしい尊敬や敬意を抱くだけではありません、何の行動も生み出さない受動的な感情で終わるものではありません。私たちがみことばを通して、神様の姿を覚えて、聖さや義、あわれみ深さや愛に心を本当に留めるのであれば、私たちはただ神様に対して、感謝の思いを抱くだけではなく、その前に喜んでひれ伏そうとするのです。神様がいったいだれなのかを本当に知るのであれば、私たちはこの偉大な方に対して、恐れや敬意を持つだけでは終われません。その方に対して喜んで賛美をささげ、そして、何よりもこの方が言われることに喜んで従っていこうとするのです。私のやり方ではありません、あなたのやり方を。私の思いや考えではありません、あなたの思いや考えを。私の願いではありません、あなたのみこころを私に教えてくださいと。そうやっていつも神様を追い求めながら、神様を中心にしながら、従順に歩んで行こうとするのです。

それは、私たちだけの話ではありません。思い返してみれば、アブラハムもそのように歩んでいた信仰者でした。愛するひとり息子、イサクをささげるようにと神様から命じられた時、彼は混乱を覚えたと容易に想像できます。イサクを通して子孫を増やされると約束されていたからこそ、どうして祭壇の上で殺さなければならないのかと理解できなかったでしょう。それでも彼は神様のことばに喜んで従いました。その時の様子を御使いはこのように口にしています。創世記22：12に「御使いは仰せられた。『あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。』」と記されています。アブラハムの神様に対する恐れはどのような形で表れたのでしょうか？神様に対する尊敬の念、畏敬の念、感謝の思いを抱いただけだったのでしょうか？いいえ、そうではありません。彼は神様を恐れたからこそ従順という形でそれを表していました。たとえ自分に何が起きているのかわからなかったとしても、神様の姿を覚えて、そのことばに進んで従ったのです。それが「主を恐れる」ということでした。それが信仰者のあり方でした。

「主を恐れる」というのは自分ではなく、神様を愛して、神様に従って、神様の栄光が現されることをひたすらに求めることなのです。そして、これがすべての知識の初めでした。私たちはこの後、箴言に書かれている内容を見ていきますけれども、すべての内容の土台は、まさにこの7節にかかっているということです。ある人は箴言を読む時、そこに記されているあれをしなさいとか、これはしてはいけませんというルールにまず心がとらわれることがあります。そして、そのようないろいろなルールだけ見て、そのルールに則って、外側のふるまいだけに目を留めたりするのです。

しかし、箴言が教えようとしているメッセージはそうではありません。すべての始まりはまず「主を恐れる」ことでした。すべての始まりは、まず私たちが心から神様のことを愛して、神様に喜んで従ってい

くこと、神様を正しく恐れることが最初のスタートでした。そして、正しい心を持つことを通して、私たちはいろいろな神様の知恵や教えを身につけていくことができるのです。ですから私たちは箴言を開いて、いろいろなところだけを取り出してきて、この最初の１：７を忘れることはできません。最初から最後までずっと大切なことは、私たちがいつもどんな時も主を正しく恐れることでした。

最後にひとりひとり考えてみてください。私たちは実際に置かれた自分の状況を考えることができます。自分の前に置かれた問題に向き合うことができます。しかし、そのことに向き合う前に、自分自身の心に問いかけてみなければいけないのです。果たして、自分は神様のことを本当に愛しているのだろうか、いろいろな問題に向き合う前に、まず私たちは自分自身に問わないといけません。聖書に描かれている神様の姿を覚えて、神様の前に自分は正しい主への恐れを持っているのだろうか。それがなかったとしたら何も始まりません。「主を恐れる」ことは知恵の初めでした。来週からは具体的な知恵を箴言の中から見ていきます。しかし、それを見ていく中にも覚えていてください。この１：７がすべてのスタート地点でした。神様を恐れることなく「愚か者」のように知恵と訓戒を拒み続けていくのか、それとも神様を正しく恐れて、この方の知恵を心からすなおに受け入れ、従っていくのか、二つしか選択はありません。いろいろな問題は確かに日々起こってきます。しかし、そのような時であったとしても主を正しく恐れて、主の知恵に拠り頼んでいく生き方こそ、私たちにとっては大きな慰め、大きな平安、大きな喜びとなるものではありません。来週はそのすばらしい知恵をより詳しく見たいと思います。何よりも今週はこの主を覚えて、主を正しく恐れて、主を愛する者として歩んでいきましょう。